
ゼロの使い魔二次「・・・あ、おれ、詰んだ」

神代ふみあき

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ゼロの使い魔「二次」・・・あ、おれ、詰んだ」

【Nコード】

N7864Z

【作者名】

神代ふみあき

【あらすじ】

年末記念突発アップ！ ノリで書いたので続きは期待しないでね
W・・・転生者ばかりのトリスティンで頑張るオリ主の話です

第一話（前書き）

年末記念突発アップ！
適当に書きましたw

第一話

ゼロ魔二次 「・・・あ、おれ、詰んだ」

一話

まあ、なんだ、双子の弟として生まれた。

双子は不吉だとか言う話になるかと思っただけで、間引かれることがなかったので安心安心。

そう、いろいろと聞いているうちに理解できるようになった話で聞くと、我が家は貴族で、格式が高いそう。

まあ、理解不能の単語も多いので、そこまで解っただけでも儲けものだと思うことにしている。

というわけで、日々、乳母役の巨人お姉さんの乳を堪能する。

うむうむ、うまうま。

先日、兄が掴まり立ちを始めたので、後追いで始めることにした。

ふふふ、兄よ、弟は鉄の意志があるのだよ。置いては生かせぬよ？

というわけで、二人そろって筋肉痛になるまでゴロゴロしていたのだが、それをみていたメイドたちが愛らしいと騒いでいる。

ふふふ、我らの幼児愛で屋敷は満たされておりませぬ、兄上。

と、一人小芝居が癖になっている幼児生活体験者の転生者でした。

兄がしゃべれるようになったので、それにあわせて俺、いや、僕もしゃべり出すことにした。

とりあえず、夜中にいつの間にか独り言を言っていて、添い寝の巨乳メイドを怖がらせるということはもうないと思う。

とはいえ、世にいう転生主人公のようにチートはなし。めんどくさいし目立ちたくない。

僕は兄の陰に隠れて、ヒソソリ生きようと心に誓っている。

の、だけどねえ……。

この、なんだ、教育係と称されるオッサンの傲慢な貴族中心話はどうにかならんかね？

兄上もすごい勢いで吸収しているものだから発言がアホな方向に急速進化してるし。

キューーーーンとかいう音が聞こえそうな方向で急速急速吸収中。

あかんあかん、あんちゃんそりゃあかんで？

というわけで、じっくり一晩二晩かけて熱心に教育し直したところ、方向修正に成功しつつある模様。

父上に言っつて、教育係も変えてもらったんだけど、行動自体がチートだったたるうかと首を傾げたが、あのオッサンは祖父母の勧めと言っただけで雇ったので、気に入らなかつたそうなの。

だから、当事者の子供が気に入らないと言っつてもらえて助かつた

という。

「ヴェリエラ、ソナタのその心根は正しい貴族といえる。そのまま正しく育ちなさい」

「はい、ちちうえ！」

「うむ、ヴェリエラ・ド・ロレーヌ。君の人生に幸多からんことを」

・・・父上、あなたはどこの殺人宗教家だ？

つつか、いやな予感を感じないでもないけど、きれいにスルー、これが僕の人生における成功と考えることにした。

スルー、スルー。

というわけで、ヴェリエラ＝ド＝ロレーヌは頑張って生きています。

・・・あれ？

「ド＝ロレーヌ」？

どこかで聞いたことないか？

あれー、と首を傾げているうちに母上合流。

母上もあの教育係は嫌いだったと、すっぱりと素直に告白。

結構貴族らしくない素直さだなあ、と思った。

というか、母上。

なんだかおなか大きくないっすか？

「ま、おませさんね。でもその通りよ、あなたの弟か妹が入ってるわ」

は、入ってるっすか・・・へえ。
で、その、さわっていいっすか？

「いいわよ？ 優しくさわってね？」

「はい、ははうえー！」

というわけで、ちょっとさわってみると、こうなんというか、様々な感じがした。

体温とか、熱気とか、意志とか、歌とか・・・歌？

「母上、中の子たちが歌ってませんか？」

「・・・ヴァリエラ。その歌はどんな歌？」

「えーっと、こう、なんというか、楽しそうで、終わらない歌を・・・
こう、みんなで、そう、三人ぐらいで一緒に歌ってる感じですよ」

僕のその答えに、にっこりほほえむ母上。

「あなた、この子は水と風の才能がありそうですね」

「ふむ、歌は解るが、何人かまではわからなかったな」

「私は何人かは解りましたが、歌は解りませんでした」

両親の言うことには、歌と感ずるのは体内での心音で、おなかの中にいるのは双子だそうだ。

で、三人というのは母上の心音も含めての話。
なるほど、と思わされた。

「兄上は、どうなのでしょう？」

「あの子は歌、とは言わなかったけど、風の素質ね。典型的なドローレーヌだもの」

なるほど、なるほど。
とこるで、

「風とか水とか、素質って何の素質ですか？」

ぎよっとする両親だったが、不意に僕をまじまじと見た後で何かに気づき、おもしろそうに笑い始めた。

わかった、わかりましたよ、引っかかっていた感覚の意味が！

ゼロ、そう、ゼロの使い魔！！

素質は魔法の素質。

そう、魔法！

やっべー、兄上の再洗脳って原作ブレイクだったってか？
また、あのオッサンに洗脳し直してもらうのもなんなんで、がつりスルーしますけどね。

で、ドゥロレーヌ、その長兄ヴァリエといえば噛ませ犬。
タバサとキュルケを仲良くさせるための子悪人。
それを小善人に修正してしまった。

これでは、と思ったけれど、歴史の修正力とかトリステイン貴族の小ささに期待しようと思いき直すことにした。

だって、小説読むと思うけど、ちっさいもんなあ、トリステイン貴族の根性。

あんだけちっさければ、兄上の代役はいくらでもいるよね、うん。

つづかき、もしかして、おれ、詰んだ？

第二話

一話

修正しても修正しても劣化する兄上の性格強制を本格化したところで、父上から新しい家庭教師が紹介された。

結構かわいい感じ系のお姉さんとDS系のお姉さん。

どっちにする？ と母上が聞いたので、兄上はかわいい感じに行った。

じゃあ、と僕はDS系に。

両親は一瞬困ったかのような感じだったけれど、何かを決断しようだった。

「よし、二人のために両方雇おう」

「え？」

どうやら二人は候補で、僕らにどちらかを選ばせるという話だったらしい。

しまった、僕も兄上と一緒に行けばよかった。

でも、あつちは、なんというか、身の危険を感じるんだよね、うん、こっ、性的に？

で、DS感バリバリのほうは、どちらかという于行儀のいい軍用犬ってかんじ。

もしくは、そう、走るだけのために生まれたサラブレッド。そんな感じ。

あ、そうか、あれだ、にーな。

間違いない。

「よろしいのですか、ぼっちゃま。私は厳しく恐ろしいですよ？」
「でも、優しそうだよね？」

瞬間、真っ赤になったDSさん。
やっぱ、こつちで正解だったに違いない。

まあ、正解も不正解もない。

DSさん、マルガリータは自称通りに厳しく恐ろしかったけど優秀だった。

で、優しいお姉さん系、ヘンリエッタは子供にしか見せない裏の顔があり、それが怖かった。

兄上は授業三日目で性的に襲われそうになり逃げ出した。
で、その現場に居合わせた僕も襲われそうになったんだけど、マルガリータに教わった護身術で撃退。

結構痛い関節技のほすなんだけど、幼児に間接を決められているという現実に酔っていて、痛みよりも快樂をもさぼっているのがさらに怖かった。

どうしよう、これ、と思ったんだけど、この間接技の一事で折檻はご馳走という方程式ができあがったみたいで、かなり簡単に現場を押さえて折檻という流れになっていた。

教育上よろしくないので兄上には見せていないけど、頻繁に聞こえる艶っぽい声に兄上もなんだかいろいろと目覚めているように感

じる。

すまん、兄上。

弟はそんなにマせてないし、先は行っていないませんよ？

だから、その、恨みがましい視線はやめましようよ、ね？

礼儀作法はひととおり、魔法は一応「どつと」になった僕たち兄弟は、父上につれられたある貴族の夜会に招かれた。

どうやら中流以下の貴族の定期夜会だそうで、そこに子供を連れてきて、今後の交流の足がかりにせよ、ということらしい。

そんなわけで、子供夜会の部屋に行ったんだけど、これが、また、頭の痛いことが発覚。

なんと、その場にいた貴族子供の大半が「転生者」と発覚。

なんかいろいろとネタが書いてあり、それに反応できたら仲間と言うことらしい。

正直、兄上の後ろに隠れている気弱な弟を演じつつ、兄上を背後から操縦していたので気づかなかったけど、怪しげなネタ満載の部屋に突っ込みを入れつつ楽しそうにはなす転生者たち。

で、ふつうの子供組は仕方ないので普通の貴族の流儀で会話することにした。

「・・・よかったわ、あの変な人たちみたいな人しかいないか思ってたわ」

「僕たちもよかったです。あなたみたいな美しい人を気にしない野暮ばかりで、ね、兄上」

「そうだな、ヴァリエラ。私は、ヴァリエード＝ロレーヌと申しま

す。こちらは弟のヴァリエラ」
「ヴァリエラです。」

ちょこんと、二人で礼を取ると、少女も同様に礼をした。

「私は、モンモランシー＝マルガリタ＝ラ＝フェール＝ド＝モンモ
ランシです」

内心、驚いた。

モンモン、ドリルじゃねえ、と。

「あら、弟さんは驚きのようですね？」

「はい、お噂以上に美しいお嬢様でしたので」

「ま、おじょうず」

思いの外うれしそうなモンモン。

やっぱり、キザせりふに弱いんかい、モンモン。

で、僕たちの背後で転生者集団がどよめいていた。

「」「」「」「モンモン、ドリルじゃねえ！」「」「」「」

ああ、やっぱり、思うことは一緒か。

でも、それを言葉にするなよ、こらえ性ねえなあ、もう。

「・・・ヴァリエラ、彼らが何を言っているか解るか？」

「さあ？ でも、乙女の心を傷つける悪意であることは理解できま
す」

「うむ、ここは決闘か？」

「私と兄上でも勝てませぬ」

「しかし、勝てぬからといって名誉を捨てるわけには行かんぞ？」
「ですが、兄上。勝てぬ戦いをして負けて満足なのは戦ったものだけです。巻き込まれたものは迷惑でしょう」
「ふむ、そうだな。ミスモンモランシに迷惑、か」

そこまで頭が回った兄上は、そつとハンケチをモンモンの目尻に当てる。

「今はあなたの名誉を守ることができない若輩ものですが、いつしか我ら兄弟があなたの心を守りましょう」

「はい、兄上とともに、この無礼の決着は必ず」

そういつて、僕は一本のリボンを彼女の髪の毛に結ぶ。

「これが我ら兄弟の誓いのおかしです、ミスモンモランシ」
「兄上とともに、この誓いを貴女に」

というわけで、モンモンに兄上がフラグをたてました。

よしよし、ギューシュの席をゲットー。

つて、原作ブレイクか！？

つつか、こんだけ転生者がいるんだから、気にするだけ無駄か。

鮮やかなナンパの手口に興味を引かれたのか、転生者たちが僕らを取り巻いた。

口々に質問してくるので、女性を敬うことと騎士の心で接することを示すと、なぜか「紳士会^{へんたい}」という集団に招かれることになってしまった。

とはいえ、僕たち兄弟がそのまま行ってしまうと同類に見られつ

いまうので、兄上はこの部屋に残して僕だけ同行した。

「ミスタヴァリエラ・・・」

「ミスモンモランシ。弟はあれでも魔法より護身術が得意だ。心配しなくてもいいよ」

そんなやりとりが聞こえたので、内心「グツジョブ！」と兄上に声をかけていた弟だった。

第三話

三話

夜会から帰って父上の書齋。
各の報告会になりました。

で、兄上はあれから普通の貴族子女をまとめて、交流会を開くに至ったそうで、実に有能な感じですよ。

では、僕は、というと、結構絶望的な話だったりします。
何でも、彼ら紳士会へんたいは、転生者の中でも（転生者は自称していませんでしたが、それっぽい自称はしてました。囁くもの、って、どこのモフツフだ？）女性にモテない集団だそうで、切実にモテた
いとか。

そこで、いろいろと女性へのたち位置を指南したところかなり感謝され、いろいろと情報をもらえました。

まず、最近横行している「異端審問」。これの原因が転生者であることがわかりました。

いわゆる転生チートによる異端改革で、バカみたいな開発をした
もんで異端。

加えて、身分革命だとか平民の地位向上とか叫んでいたので異端。

異端異端異端。

首切りの嵐となったそうよ。

「ち、ちちつえ、なぜ領民や貴族の生活が向上すると異端なのですか？」

さすが魔改造兄上、その目の付けどころがシャープです。
そんな兄上に、どこから話したものと首を傾げる父上でしたが、
いろいろと決めたようです。

「まず、ロマリアは、われらハルケギニアの成長を望んでおらん」
「・・・成長なくば、淀んで腐るだけです」

「そのとおりだがな、成長による制御不能よりも淀んだ沼地の方が
好ましいのだよ、彼らにはな」

実に明確な、反ロマリア発言でした。

いろいろと父上の話を聞いた兄上は、どこまでがセーフでどこま
でがアウトなのかを見極めているようでした。

すごいです、兄上。

すでに原作の影も形もありません！

すばらしい統治者になるであろう兄上へ、弟をニート保護してく
ださい。

お城の片隅で植物のように生きることが誓いますので。

「ヴァリエラ、我ら兄弟、この難局を切り抜けるぞ！」

「はい、もちろんです、兄上」

だから、ニートさせてください。

「よい返事だ、ヴァリエラ。ではヴァリエはこのまま貴族子弟会を
維持しつつ、運営せよ」

「はい！」

「そしてヴァリエラ。ソナタは、ソナタの兄と共に歩んだ貴族の道
を布教せよ」

・・・え？

「貴族である誇りを胸に、貴族であり続けることに意味がある生き方を、ヴァリエラから私は教わったのだよ。この正しい生き方を、トリステインに広げるのはおまえしかない」

・・・え？

「ヴァリエラ、やってくれるな？」

・・・あ、おれ、詰んだ？

第四話

四話

五歳の頃から始まった国内巡業は、まじ十年以上にわたったよ、うん。

その間で、数多くの貴族の子供と交流を持って、普通の貴族は兄上に、ダメな子は紳士会へんたいに紹介した。

とりあえず、普通の子には普通に貴族のあり方を説き、ダメな子には取り繕う必要性と首を刈られるレベルの開発は危険と説いたところ、誇り高い貴族になったとか、奇々怪々な子供が普通になったとご好評いただき、秘書役でついて回っているマルガリータの予定表には、魔法学校入学のその日までの予定がびっしりだそうだ。

見たくないけどね。

「ぼっちゃん、来週からの予定ですが・・・」

たしか、グラントプレ家だったよね？

「いえ、ヴァリエール家から是非とも、と言うお話が入ってきました」

「うゝえ？ 聞いてないですよ？」

「昨夜、鷹便で届きました」

「うわー、大貴族のご令嬢相手に何をしろと？」

「是非とも、三女、ルイズ様のお相手を、とのことですよ」

「うっわぁ・・・」

いろいろとメインキャラたちには会いましたけど、ご本人とは会いたくなかったんですがねえ。

なんかいろいろと面倒でしょ？

「断れないかなあ・・・」

「むりですね」

「なんで？」

「これ（金）が破格ですので」

・・・息子を金で売るなよ、父上。

そんなわけで、ヴァリエール家で、お友達要員として住んでいたんだけど、これがまた、原作ぶちこわし。

長女は、魔法が普通で肉体的コンプレックスから気弱な感じになつてるし、次女は当初原因不明の病弱だったものの、生死の境をさまよった以降、今までの不調が魔法の性質と性格が合っていないかったためと判明。熱血豪快「カリン二世」を名乗るようになってからは超健康で、「ヴァリエールの魔法はハルケギニアーいち！」が合言葉だとか。

で、三女。

これが原作ぶちこわし。

何しろ本人、どうやら転生者らしく、自分が虚無であることを自覚しているせいか、超余裕。

で、平民メイドなんかと遊んでいたり、魔法の修行など全くしていなかった。

「だって、わたしには偉大な力があるのよ？ 何でそんなことしな

いといけないのお?」

まじム力ついたので、拳で説教したところ、快くこっちの考えを受け入れてくれた。

いや、はじめはカーリ又様やピエル様に告げ口をしていたんだけど、何があるうとも文句を言いませんという誓約書があるので何も言わず、日々強制されてゆく三女の性格を見つめるだけだった。

「貴族の娘に拳で説教つて、どんだけ無茶なのよ」

「賤の出来ていない野生動物には、痛みで教育するのが普通です」

という会話の後、半年で、表向きは貴族の子女として恥ずかしくない態度がとれるようになってきた。

もちろん、人目のないところまで気合いを入れるとは言わないし、普通の貴族だって気の抜きどころがあるんだけど、この三女、どうやらお嬢様っぽい言動や行動を面白がっている風がある。

なるほど、つまり、中身は男だな?

まあ、その辺の考察はいい。

そのうち、イヤでも女の事件に巻き込まれて、心身共に女である事実打ちのめされるだろうから。

「ねえ、ヴァリエラ」

「なんですか、ルイズ」

「あなた、なんでそんなに普通なのに普通じゃないの?」

意味が分かりませんよ、三女。

「だって、見た目は結構いいけど、魔法はドット、礼法も普通、ダ

ンスだつてあか抜けないし。もっと磨けば光るんじゃないかしら？」

喧嘩を売ってるなら買いますよ、主に拳で。

「い、いやいや、そうじゃなくて、無駄に手を抜いてないかなーと」

む、鋭いですね、三女。

一言言っておきますが、僕の実力が低いのは、それなりに考えていますよ？」

ほら、兄上が現在ラインの上、トライアングル一歩手前なので、それを越えたらラインになるのかなーとか、ダンスもこの前みたら兄上のステップがいまいちだったので、それに会わせてみようかなーとか。

「なによ、ヴァリエがへボだからあわせるてこと？」

「いえいえ、そうじゃなくて、兄上あつての僕ですから。ともに歩くことを誓った兄弟なのですよ」

「もしかしたら、ヴァリエの方でも貴方のへボさを見て、実力を落としてるんじゃないか？」

・・・あ、考えてもみなかった。

ちよつと今度手紙で聞いてみよつと。

兄上は、弟など見ずに羽ばたいてくださいって。

「あ、そうそう、聞いてる？」

「何をですか？」

「お父様が、ヴァリエラを婿につてド＝ロレーヌに申し込んでるつて」

「・・・ぶっ」

「私か、エレノール姉様につて話だけど、本気で聞いてないみた

いね」

なに、その死にフラグ。

「とりあえず、私は反対じゃないわよ?」

僕は反対です、だって、あんた、中身男じゃん! . . . とはいえなかった。

. . . あ、おれ、詰んだ?

第五話

五話

転生者、多いだろうなーと思っていたんだけど、むちゃくちゃな感じだった。

なにしろその数、入学者の2/3。

居すぎだろう!?

でも、紳士会へんたいの奴に聞いてみると、実はこれの三倍は居たそうだが、首切りリサイクルに巻き込まれたそうだ。

なんとという、悲劇、というか喜劇。

そう、転生者の大半は紳士会へんたいのやつらか、僕がお友達巡業へんたいの中で紳士会を紹介した相手だった。

というわけで、紳士会へんたいとの仲介を兄上から申しつけた僕だった。

「ヴァリエラさま!」

入学式の後、背後から突如声をかけられたので振り返ると、そこには美しい金髪の女の子。

「モンモランシ様、お久しぶりです」

騎士の礼をとると、彼女は真っ赤になった。

うんうん、キザが非常に有効だなあ。

趣味は、まあ、仕方ないけどね。

「もう、おやめになつてくださいませ、ヴァリエラさまあ」

あはは、と笑つて向き直ると、彼女もほほえんでいる。

にこやかな空気の中、ふらりと現れた兄上もふくめて会話していると、なぜかルイズやギューシユが絡んできた。

ルイズはお友達巡業の最後、ギューシユはお友達巡業の途中だったけど、かなり仲良くなつたつもりだ。

「やあ、親友。こちらの美しい方々をご紹介ただけるかな？」

「もう、ヴァリエラ。急にどこかに行かないでよ」

奇妙な感じだけど、僕以外原作キャラで仲良く会話という珍しい風景に出会ってしまったのだった。

寮の部屋の隣は兄上で、反対となりはギーシユだった。

兄上とは必ず隣になるだろうなあ、とおもっていたけど、ギーシユが隣とは思わなかった。

もっとモブっぽい配置になると思っていたんだけどなあ。

「ヴァリエラ、これからも頼むぞ」

「親友、そしてヴァリエ、よろしくたのむよ！」

以後、なぜか僕らは薔薇園の三兄弟と呼ばれるようになった。

・・・あ、おれ、詰んだ？

サイド モンモランシ

かのご兄弟にお会いしたのは初めて参加した夜会だった。
というか、子供心にも思ったけど、最初の夜会としては最悪のた
ぐ이었다と思う。

訳の分からない会話をする同年代の貴族男子。下品な笑いと奇異
な振る舞いにうんざりしているところで彼らは現れた。

後に兄弟と言えば彼らを指すかのように言われる様になる前の二
人に出会えた私は幸せだろう。

礼儀にそつた挨拶と会話。

笑顔と気遣い。

実に清浄な空気に感じられた。

その空気を乱したのも、また、あの奇異な男たち。

あたかも私を揶揄するかのような言動に悔し涙を浮かべていると、
お二人は私を慰めてくださいました。

そして、「誓いの証」と後に有名になるリボンをくださったので
す。

以降、お二人は、私の前では騎士がごとくに振る舞うのが「お遊
び」になってしまい、いつもいつも恥ずかしい思いをさせられます
わ。

ヴァリエ様は、あの夜会以降、子供の集まりを仕切り、貴族のあ
り方について勉強会を開いていただけのようになりまし、ヴァ
リエ様は、その勉強会に参加する意志や資格がある方を次々とご
紹介していただいた関係で、私たちの集まり、ソサエティーは貴族
社会の一翼を担う集団になりつつあります。

親の権力や派閥にとらわれぬ、心の貴族を目指すための修行の場。

ああ、この会合の初めから居られる私はなんて幸せなんでしょう。
ご兄弟には感謝が絶えませんわ。

サイド ギューシュ

僕が彼と出会ったのは、もう二年も前のこと。
教育係という名目で、僕より魔法の力が弱い奴が来るなんて、と
父上に抗議したけれど、「おまえは魔法の力が強いかもしれんが頭
の力が弱い」と明らかに実の息子に言う台詞じゃないことを叩きつ
けられて落ち込んだのも良い思い出だ。

・・・いや、ちゃんと勉強してるよ？

「本当ですか？ きみの絶対は怪しいですかねえ？」

苦笑いの親友、ヴァリエルと親友となれたのは、あの魔法戦闘訓
練の時だったと思う。

正直に言うと、頭に衝撃を受けすぎたせいで曖昧だけど、それで
も彼の表情を忘れない。

そう、うちの平民メイドに意地悪をしたあとの訓練。

彼は、泣きながら僕を殴りつけていた。

「僕は、ぼくは！ 君が後悔して泣くまで殴ることをやめない！！」

結局は彼の拳が砕けていることに気づいた先生が彼を止めたんだ
けど、それでも彼は殴る動作をやめなかった。

いや、痛みで気絶しているのにその意志を貫いていたのだ。

これが誇り高き貴族の姿だ、と父上はおっしゃった。

以降、心の中で師と仰ぎ、親友と肩を組む僕らの関係が始まったのだ。

サイド マル

目の前で展開している空間に入り込めないマリコル又です。

おかしいなあ、学院入学前にド・ローレー又お友達包囲網に参加して、うれしはずかし「お友達」生活をしているはずなのに……。

なぜかキャンセルされた。

あれー？

加えて、転生者組織にも加えてもらえなかった。

俺も転生者だったのに。

あれー？

あの、ド＝ローレー又の双子の弟なんて原作にいなかったくせに話の中心にいるし。

……なんかオカシくないか？

「やあ、子豚。なに首をひねってるんだい？」

「子、子豚とは失敬な！ 僕には風上という二つ名が！」

見上げる先はよく見知った相手。

くそ、こいつ等につきまとわれてたんじゃ、転生しても意味ないじゃないか！

くそお！ この恨みを誰にぶつけらればあ！

第六話（前書き）

ちよっとみじかいw

第六話

六話

原作当初、ルイズは人気者だったが、目の前のルイズは別物だった。

一応、ド・ロレーヌお友達連合の内側にいるので「お友達」は多いのだけれども、彼女自身が「あれ」なので、どちらかというところ「紳士会」向きだったりする。

すでに魔法のレベルと社会的地位が直結しない社会形態へ移行しつつある魔法学校だったが、さすがに魔法成功率ゼロというのは特異で、ざわめきで迎えられていた。

が、これを嘲笑で迎え打つ存在が居る。

キュルケ、であった。

ツエルプストーは領地が隣接しているだけにあの毎晩行われる修行を知っているのだ。

「あれを見てヴァリエールを笑える奴なんかいないわ」

「ああ、ツエルプストーさんはご存じなんですね」

「・・・ド・ロレーヌマイナーね。貴方もあそこで暮らしてたならしってるでしょ？」

しらいでか。

あの次女と婦人の怪物対決。

毎夜毎夜行われる頂上決戦。

あれ見てたら、ラ・ヴァリエールに逆らうとか考えないって。

「ねえ、荒れ地に半径1000メートルの穴があいたってほんと？」

「本当です。さらに、その穴の中では魔法が使えなくなるので、メイジ収容所が建てられました」

「……こわ……」

で、ルイズはどんな魔法を使おうとも爆発。

どこでも爆発何でも爆発。

正直、ピエール様が全力でかけた固定化を爆破したのを見て、僕は逃げ出したくなりましたよ、ええ。

「それは怖いわね」

「さらに、爆破できるとしたのなら、エアハンマーだって爆破するんですよ、ルイズ！」

げ、と言う視線がルイズに集中。

本人は「てへ」と舌を出して可愛さを演出してるけど、全然にあいませんから！！

「……なによ、そこまで言わなくてもいいじゃない……」

……あ、おれ、詰んだ？

第七話

最終話

まあ、何というか。

なぜか兄上がいたずらしなかった影響か、マルがキュルケのドレスを切り裂いて、女子にタバサの本を燃やさせた。

が、原作と違うところは、すでにタバサとキュルケの友情がはぐくまれていて、二人による強制捜査で犯人が「マル」であることが判明。

速攻でつるされて、一晩放置された。

その影響で「マル」は新しい世界の扉を開いたそうなの。

「兄上、彼も一人で一人の道を開いた勇者ですね」「すまん、弟よ。あのマルの話はしないでくれ。どうも気がすぐれん」

いや、いじめじゃないよ？

だって、そんな扱いにも喜びを感じているんだから、マル。

で、この一年で兄上はトライアングルに、僕はラインの上に進歩した。

実に順調だと思う。

僕がラインの上、そろそろトライアングルか、というところまで進歩したのは、学院内で流行った病気の影響で、氷を作れるメイジ総出で氷を作り続けた影響だと思う。

あのとき、一人また一人と倒れてゆき、タバサですら魔力切れになつて倒れたのを見て、全力を出さないと！ と気合いが入った事

以降、実力が上がっているのを感じ始めた。

手慰みで彫像を氷で作っていたところ、紳士会へんたいの方々から発注がいろいろとあり、それを作り続けたのも良い影響だったかもしれない。

ともあれ、そんな成長した僕たちが進級前に行くこと。

そう、使い魔召還の儀式！！

すでにギューシユはジャイアントモールだしモンモランシは蛙。

兄上は青いきれいな鳥を呼びだした。

「すてきです、兄上！」

「ありがとう。でもおまえの使い魔もすばらしいに決まっているぞ」
「？」

うわ、兄上、プレッシャーですかあ！？

思わず肩に入った力を抜いて、ルーンを唱えだした。

三千世界で猛威を振るい、神がごとくに君臨する幻の獣よ、我に従い生涯をともにする幻の獣よ！

我と共にあれ、我と共にあれ！

呪文の完成と共に銀色の板が現れる。

いや、これは召還の扉。

この先にいる存在と僕がつながっていれば、向こうからきてくれる！

そう思った瞬間、ぱつとそれが現れる。
ベースは黄色で黒縞の「それ」が！！

「ピカ？」

・・・あ、おれ、詰んだ？

ゼロ魔二次「・・・あ、おれ、詰んだ」終了

第七話（後書き）

というわけで、一気に書いてしまいました。一気にマップです。

まあ、年末の時間つぶしにでもなれば、と思って書きました。

楽しめましたか？

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7864z/>

ゼロの使い魔二次「・・・あ、おれ、詰んだ」

2011年12月28日02時11分発行